

果てのない挑戦  
～日本とアイルランドの架け橋～

野口 萌・佐藤 山葉

1957年に国交樹立、首都ダブリンに日本大使館が開設され今年で50年のアイルランド。日本からは距離的にも遠く、関係性が薄いと思われがちだが、東日本大震災の際には日本赤十字、EUを通じて多額の義援金、物資を提供してくれた、日本にとっての友好国である。

そのアイルランドから今年9月に新しい駐日大使がやってきた。小柄で、包み込んでくれるような笑顔で迎えてくれたのは、着任したばかりのアイルランド大使のアン・バリントンさん。女性として外交の第一線に立つことの苦勞について、「特に感じたことはない」と言い切る。その理由を彼女はこう語る。

「ものごとを性別の問題としてとらえたことがない」。

アイルランドという小規模国に生まれたために、子供のころからバリントン大使は、他国の文化、価値観を吸収して本国に持ち帰らなければ、という使命感を持っていた。そこで彼女は、学生時代、毎年夏の長期休暇を利用してパリ、ロンドン、ニューヨークなどを旅し、世界を知っていった。その旅先は先進国だけではなく、南アフリカで国連ボランティア計画(UNV)のメンバーとして2年ほど活動もした。富める国もそうでない国も見てきたバリントン大使の「自由な時間がある学生のうちに世界を知るべきだ」という言葉には説得力があった。

バリントン大使の日本駐在には家族が同行している。家庭面では夫と家事を分担し、恵まれた環境にあるという。女性リーダーの台頭が珍しくはない現代だが、家庭と仕事の両立は依然難題だ。全世界の働く女性が抱えるこれらの問題を特に意識したことはない、と答えた上で、男性女性ともに状況に合わせて働き方を変えるべきだ、とバリントン大使。

「日本もアイルランドも女性を内閣により多く登用しているのはすばらしいこと。女性が働き続けるためには環境を整えていかなければならない。」

日本とアイルランドには類似点が多い、と彼女はいう。豊かな自然、温厚な国民性。来日してすぐに両国国技館で見た相撲も彼女を魅了したようだ。日本料理が作れるようになりたい、という大使の言葉は家庭を持つ一人の女性としての一面をうかがわせる。友人と青春を謳歌しつつも世界を駆けまわったかつての女子学生は、今、アイルランド大使として、日本で新しいスタートを切ったばかりだ。

「アイルランドと日本の国交をさらに良好にすることが今の私の使命」とバリントン大使は爽やかに語る。さまざまな国々を見てきた彼女の目には、故郷と日本を重ねながら、アイルランドと日本が固く手を結ぶ未来が映っているのだろう。

#### 編集後記

夏にインターンをさせてもらったアイルランド大使館へ、今度は記者として再訪できるなんて思ってもみなかったです。出会いに感謝し、人とのつながりを大切にしようと思いを改めました。大使は自由な時間のある学生のうちに、というけれど、時間はあるようでないようで・・・精進します。

野口 萌

留学などにあまり興味のなかったわたしにとって、今回のアイルランド大使館訪問、そしてバリントン大使への直接のインタビューという経験は貴重でした。外の世界を知ること、アイルランド同様に島国の日本にとっても重要だと痛感し、これまでのわたしの考えを大きく変えてくれました。また、働く女性のライフスタイルは自分としても気になるところで、しっかりと両立できている大使の話聞いたことは大きかったです。それらも踏まえた上で、ひとりの学生が今や国を負う大使になったという、学生の可能性を示唆してくれる彼女の生き様が記事に表われるよう努めました。

佐藤山葉